

ことばが力を失うとき

児玉徳美

1. ことばの力：社会での役割

言語活動がもたらすものは何であろうか。人はことばを介して何を語りたいのか、メッセージ（主張・心情・情報など）をどのように伝えているのか、メッセージはどのように受け止められ何をもたらしているのか、メッセージはどのような判断や思考に基づくのであろうか。社会において言語活動がはたす効果は多様である。ことばは人を鼓舞することあれば、人を抑圧しだますこともある。ことばに込められた意図や意味に共感することあれば、服従したり逆に反発することもある。ことばの「論理」は判断や思考の形成と密接に結合することあれば、その結びつきが弱かったりことばの「論理」そのものが否定されることもある。本稿の目的はことばが社会においてどのような力を持ち、その力を失うのはどのようなときであるのかを考察することである。

ハリデー Halliday (1961) 後の選択体系機能言語学はチョムスキー Chomsky (1957) 後の生成文法の対極をなし、言語学（つまり文法）は談話の基礎として存在しなければならないという立場をとっている。言語が社会の必要を満たすために生成されると考える選択体系機能言語学によると、談話の意味や形式に違いをもたらす場面のコンテキストは次の3つに区分される。

- (1)a. 談話の領域 (field of discourse): 何が話されるか・話題・思考・主張などの談話の内容 (活動・経験・論理・価値観などに関連)
- b. 談話の役割関係 (tenor of discourse): 誰が誰に話しているのか・談話当事者の関係 (社会的な権力関係や連帯・親密さなどに関連)
- c. 談話の様式 (mode of discourse): どのように意味が伝えられるのか・音声か文字かの表現媒体や表現法 (記号論上の様式と関連)

上記は言語以外の記号体系や社会活動を解釈する基準ともなり、何が起きているのか(活動の型)、誰が参加しているのか(役割関係)、どのように意図が伝えられているのか(伝達様式)にも適用できる。言語構造の中心をなす意味体系は(1a-c)のコンテキストの中ではたず機能に基づいてそれぞれ次の3つの部門に区分される。

- (2)a. 観念形成機能部門 (ideational component): 現実世界の経験を表現し、認知的意味や命題に関係する (例えば他動性体系)
- b. 対人関係形成機能部門 (interpersonal component): 話し手の判断・態度・感情を表現することにより他者に影響を及ぼす (例えば陳述・疑問・命令などの叙法体系)
- c. テキスト形成機能部門 (textual component): メッセージを伝えるテキストに一貫性を付与する (例えば新・旧情報にかかわる主題体系)

言語構造では何を 誰が誰に どのように 語るかが主として問題になる。(2a-c)の3部門はこの下線の3つの問いに答えており、(1a-c)のコンテキストにそれぞれ対応している。

選択体系機能言語学が規定しているわけではないが、(2)の変異版としてコンテキストの中での言語活動が社会でどのような役割をはたすかの観点からみた場合、言語活動は次の3つの機能に区別される。

- (3)a. 思考形成機能：いかに的確に思考や感情を表出し形成するか。
- b. 対人関係機能：いかにうまく人間相互の結びつきをはかるか。
- c. 情報伝達機能：いかに効果的に情報や知識を伝達するか。

(3a-c)はそれぞれ(1a-c)のコンテキストの中でことばがはたす社会的機能であり、ことばの力である。(1)のコンテキストの中での言語活動が(2)では言語構造との関連で規定され、(3)では社会的行為として規定されることになる。(3)の3つの機能は互いに関連しながら人間の社会的営みを可能にしている。

(3)の機能は人間の言語表現に固有のものではない。動物も仲間とともに生きていくうえで多かれ少なかれ(3)の機能を活用している。しかし動物と人間を区別する最大の標識は(3a)の思考形成機能であり、この機能は(3b,c)の対人関係機能や情報伝達機能をはたす前提にもなっている。チョムスキー(1966:3-31)が「言語使用の創造的側面」として指摘した3点は(3a)の特徴でもある。

- (4)a. 改新性：その場その場で新しい文を無限につくることができる。
- b. 刺激の統制からの自由：外的刺激がなくても言語を駆使できる。
- c. 状況に対する「適合性」：新しい状況に応じて適切に応答できる。

(4a-c)はすでに17世紀にデカルト学派によって注目されており、チョムスキーにより再浮上したものである。しばしばことばは「心の鏡」であるといわれるが、これは人間の心がこうした創造的活動を行なうことによる。この創造的側面から人間は動物や機械と違って刺激から自由であり同じ状況において異なる行動をとることもある。同じ功績に対して自慢したり謙遜したり当たり前のこととみなしたりする。同じ罪に対しても真実を告白したり虚偽の申し立てをしたりする。ことばの力がどちらに向かって発揮されるかは個人や場面だけでなく、時代や社会によっても違ってくる。

2. ことばを空洞化させるもの

2.1. 権力のことば

ことばが力を失うのは、社会においてことばの機能(3)やことばの創造性(4)がうまく発揮できないときに生じる。つまり(3)と(4)が阻害される度合いが強くなればなるほど、ことばの力は弱まっていく。「コミュニケーション」(communication < communicate 'share with others')とは本来「他者と共有すること」であり、発信者のメッセージが裏づけのない空虚なことばであるとき、あるいは受信者の感情や自由な思考を妨げるとき、受信者に反発や拒否を招き、発信者の意図や意味が受信者と共有されることはない。ことばを空洞化させる原因はさまざまであるが、主要には発信者、受信者、社会によって生み出される。三者は相互に関連しながら、場面のコンテキストに応じて多様に変化する。本稿では三者の代表的なものとして権力のことば、情報の過剰化、言説の秩序をとりあげる。

本節はまず権力のことばを考察する。権力のことばは強い強制力をもっており、それに抵抗する

には非難と罰を覚悟しなければならないこともある。権力のことばとは広くは力関係において強者が弱者に対して発することばをさす。本節は権力のことばが最も端的に現れる政治の領域で考えてみる。政治における権力のことばは独裁国家や軍事国家の為政者のことばに限らない。独裁国家であれ民主国家であれ、大衆の声があるなしに関係なく、政策を決定し、特定の方向に人を引っばっていくのが為政者である。為政者は危機にあるとき、危機克服の大義に向けて死をも覚悟して武器を取れと呼びかけることもある。グラハム Graham ほか（2004）はこの1千年間の間に「武器を取れ」と呼びかけ、歴史的に世界を転換させたものとして次の4つの演説をとりあげ、そこにみられる共通の本質を見事に喝破している。

- (5)a. ローマ教皇ウルバヌス2世（1095）：聖地回復に向けて最初の十字軍出兵を宣言
- b. エリザベス1世（1588）：スペイン開戦の演説
- c. ヒトラー（1938）：オーストリア併合直前の国会演説
- d. ブッシュ（2001）：テロとの戦いの宣言

グラハムほかによると、4つの演説は各時代を反映して異なる条件をもちながらも、(i)諸組織への訴え、(ii)自分たちの文化の意義の訴え、(iii)悪の他者をつくりあげること、(iv)外部勢力との統一戦線に向けての訴え、という共通点をもっている。各演説者は自分の国（や組織）の危機を救えという訴えに反対する者は愛国心に欠け自分の国を危うくする者だと批判しているという。為政者が自分の主張を正当化するため、誇張や歪曲によりすべてを善と悪に二分し、問題を矮小化・単純化するやり方はこの1千年の間に変わっていない。

具体的に（5a,d）の演説の一部をみてみよう。

- (6) 東方で、わたしたちと同じように、キリストを信ずる人々が苦しんでいる。かれらはわたしたちに救いを求めている。何故であるか。それは異教徒が聖地を占領し、キリスト教徒を迫害しているからである。わたしは同胞の苦悩をつぶさに知っている。かれらはみずからの苦しみのみならず、教会の苦しみを訴えている。かの地では聖所が流されているからである。何故エルサレムは至聖所であるのか。それは天国への門であり、地上における天国の写し絵だからである。当然、神はこの流聖を許されない。神はその解放をみずからの業として遂行なさる。この神のみ業に加わる者は神に^{よみ}嘉せられ、罪を赦され、つぐないを免ぜられる。キリスト教徒どうしの不正な戦いをやめて、神のための正義の戦いにつけ。この呼びかけに応じた者には、現世と来世を問わず、すばらしい報酬が約束されている。ためらうことはない。現世のどんなきずなも、あなた方をつなぎとめることはできない。なんとすれば、この企ては神自身が指導者であるから。

- (7)a. We're a great nation. We're a nation of resolve. We're a nation that can't be cowed by evil-doers. I've got great faith in the American people. If the American people had seen what I had seen in New York City, you'd have great faith, too. ... you'd have great faith because of the compassion and love that our fellow Americans are showing each other in times of need.

（われわれは偉大な国民であり、決断力ある国民であります。われわれは悪人どもにひるむことのない国民であります。わたしはアメリカ国民を大いに信頼しています。アメリカ国民のあなたがたが私がニューヨーク市で見たと同じ光景を見たならば、同じように信頼するでしょう。...困ったときにアメリカ人が仲間を示す思いやりや愛情にふれてアメリカ国

民を信頼するでしょう。)

- b. Today, millions of Americans mourned and prayed, and tomorrow we go back to work. Today, people from all walks of life gave thanks for the heroes; they mourn the dead; they ask for God's good graces on the families who mourn, ... This is a new kind of ----a new kind of evil. And we understand. And the American people are beginning to understand. This crusade, this war on terrorism is going to take a while.

(今日、何百万人ものアメリカ人が喪に服し、お祈りしました。明日はまた仕事に帰ります。今日はあらゆる社会的階層の人々が英雄たちに感謝をささげました。亡くなられた人々をいたみ、喪に服した家族の方々に神の恵みを願っています。...これは新しい種類の新しい種類の悪であります。そこでわれわれにはわかっています。アメリカ国民にはだんだんわかっています。テロとのこの十字軍の戦いにはしばらく時間がかかるであろうことが。)

(6)はウルバヌス2世が聖地回復に向けて十字軍の出兵を呼びかけた長演説の一節である(詳しくは橋口1974: 50-51参照)。聖職者・諸侯・騎士・民衆など多様な社会的階層を前に(i), 神の導きに従い(ii), 悪の異教徒(iii)に対してキリスト教徒の連帯と団結(i, iv)を訴えている。聖地エルサレムが流されたため神の命に従い、ためらうことなくこの戦いに加われと訴えた全キリスト教徒への檄文である。精神上、神の教えを説く装いはしているが、実際は戦いに参加した者には報酬も約束しており、俗界での現物の交換取引に近い。「神のための正義の戦い」は古来、戦時に敵・味方の双方から発せられたおなじみのことばである。1991年の湾岸戦争や2003年後のイラク戦争にも使われている。

(7)はブッシュ大統領が9.11直後に国民に訴えた演説の一部である。アメリカ国民の連帯(i)と悪(iii)におじけない不屈なアメリカ人への信頼(ii)がうたわれている。21世紀は地球規模の協力(iv)が国民国家に代わるものとしてしばしば主張されるが、不思議に(7a)にはその訴えがなく、ナショナリズムのもとに国民国家を最も重要なものとみなしている。(7b)はアメリカ国民は神の加護のもとにあり、「新しい種類の悪」であるテロリズムとの戦いを十字軍の戦いにたとえている。ここではテロの犯人が確定されていない段階でテロとの対立を宗教や文明の対立に転化している。ウッドワードWoodward(2002: 94, 134)も指適しているように、テロとの戦いを十字軍にたとえたことはブッシュ大統領の失態であった。イスラム世界との対立を招き、すぐ後で修正された。当初、テロとの戦いの作戦名を「無限の正義」(infinite justice)と呼んだが、これもすぐに「不朽の自由」(enduring freedom)に変えた。イスラム世界ではアラーのための戦いはすべて「聖戦(ジハード)」であり、アラーのみが「無限の正義」を決定できることに気づいたためである。イスラム世界との対立を回避しようとする試みはみられるが、必ずしも成功していない。

その後の動きとしてブッシュ大統領は2002年1月末の一般教書では北朝鮮・イラン・イラクの3国がテロを支援する「悪の枢軸」(axis of evil)であると名指し、2003年3月には米英の合同軍が外部組織との統一戦線(iv)に向けて国連の決議を経ないまま、イラク戦争に突入した。米国内では人身保護令状(habeas corpus)が南北戦争後初めて執行停止され、憲法で守られている人権の一部が愛国者法(Patriot Acts)のもとに棚上げされた。米国外では戦争突入後、一方でイラク国内で自爆テロが続き、他方ではイラク戦争がらみで2004年3月にマドリードでの列車爆破テロ、2005年7月にはロンドンでの同時多発爆破テロで多数の死者を出している。ハンチントンHuntington

(1996) が予告した「文明の衝突」という最悪の事態が始まっている。

為政者のことばがすべてことばを空洞化するわけではない。為政者の訴える大義や主張が危機を救うこともあれば、危機を拡大することもある。ことばが空洞化するのには、第1に為政者の訴える大義や主張に正当性がなく疑問がもたれるときである。第2に為政者の訴える大義や主張が危機を拡大し多くの犠牲者を出すときである。第3に為政者がたとえ戦争に勝ったとしても、戦いの過程で生まれた不条理に対して免罪されるわけではない。第二次大戦直後、オーウェル Orwell (1946) は言語の墮落は政治とかかわりをもつと指摘した。英国のインド支配、ソ連の粛清と追放、日本への原爆投下などのように、弁護できないものまでも弁護しようとするために、あいまいで陳腐な表現が多くなっていることを嘆き、比喩・長い語・外国語などを避けることによって英語の明晰さを取り戻すよう忠告している。

戦争や政治は「武器を取れ」と呼びかけ、多くの者を動員するだけに、ことばを空洞化する最大の要因といえる。今日ではイラク戦争に限らない。いかに核兵器を廃絶するかの問題もある。2005年8月、秋葉広島市長と伊藤長崎市長はそれぞれ被爆60周年を迎えた原爆の日(8月6日、8月9日)の平和宣言で核不拡散条約(NPT)が不調に終わったことを批判した。核兵器保有国は2000年には核兵器の廃絶を約束したにもかかわらず、2005年5月にアメリカを先頭に約束を無視し、「核兵器があなたを守る」と核抑止力に固執したことを断罪している。核廃絶に向けて両市長の声が大きいのに比べて、唯一の被爆国である日本の為政者の声が小さいのが対照的である。

2.2. 情報の過剰化

権力のことばが発信者の問題であるのに対して、入手可能な情報の変化による影響は主要には受信者の側に大きい。情報化社会で多くの情報をすばやく入手できることは受信者にとって便利であり、作業によっては質・量において格段の進歩をなしたものもある。しかし過剰な情報は受信者にとって必ずしも常にプラスではない。情報の迅速化と過剰化は区別する必要がある。情報の過剰化のなかで直接・間接的にことばを空洞化させるものとして次の3点を指摘できる。

第1は20世紀後半から始まった情報媒体の急増と関連する。テレビ、インターネット、Eメール、携帯電話、マンガ、CDなどである。その多くは情報技術の成果であり、映像や聴覚情報が従来のことば(活字文字などを含む)に代わっている。例えばテレビの映像は地球の裏側の出来事をも同時進行の形で知らせ、出来事をリアルに伝えることもある。その場合、映像自体が語り、ある種の記述を不要とし、ことばによらない思考が働いている。しかし映像などによる視聴覚情報が伝える意味は一般に文章ことばに比べて直接的であり、時間的制約から複雑な分析や考察を嫌い、その「理解」は文章ことばによる「理解」より少ない労力で達せられる。視聴覚情報は推敲や読み直しなどの再考作業を伴うことが少なく、しばしば一過性で使い捨てられ消費されていく。

第2は新たに生まれた多様な価値観やサブカルチャーとかかわる(詳しくは児玉2005参照)。世の中に情報が豊富にありその情報を得る方法を知っていても、人の処理能力を超えている。その結果、ひとりひとりがその情報をすべて身につけることができるわけではなく、鳥瞰的に見通すことができるわけでもない。情報の過剰化と個人による情報の利用は別問題である。さらに情報自体は重要なものとそうでないものを区別してくれないし、人もまた過剰な情報の中にあってその区別に鈍感になり、その区別をあまり重視しない。いずれ重要な情報とわかれば、いつでもその情報を入手でき知識としてすぐ身につくものと錯覚している。そのあげく、当面は自分の関心に合うものだ

けに接近していく。多様な価値観やサブカルチャーが共存しているが、相互にことばによる交流やぶっかり合いがあるわけではない。相互不干渉である。多様な価値観やサブカルチャーが存在することが問題ではない。そのこと自体は人にとって選択肢が広がり好ましいことである。むしろ問題は豊富な情報や多様な価値観・サブカルチャーに刺激されることもなく、(4)でみた人間の創造性が活性化されていない点にある。つまり人が自分の「なわ張り」内にとどまり、活性化に向けての判断や思考が停止している点にある。

第3に第1・第2の現象と関連して思考形成に強い影響を与える文章ことばの力が相対的に低下していることである。そのことは書店の棚からもうかがえる。雑誌や写真・マンガなどの棚がふえ、活字文字を中心とする本の棚が縮小している。携帯電話の普及で絵文字入りのメールは盛んになっているが、従来の手紙は姿を消そうとしている。全国学校図書館協議会の2004年度の調査によると、1ヶ月間に1冊も本を読まなかったのは小学生で7%、中学生で19%、高校生は43%にのぼった。高学年になるにつれて読書からと遠ざかっている。大学でも本を読む学生と読まない学生の二極化が進んでいる。

ことばによるコミュニケーションにおいて(3a)の思考形成機能や(4)の創造的活動は知識・情報・価値観などにある程度の共通基盤があってはじめて互いの思いを伝え合うことができる。しかし情報の過剰化は皮肉なことに情報や知識の不均等化あるいは目的意識や思考過程の多様化・希薄化を招き、ことばによる相互理解を円滑に進めるものとはなっていない。

2.3. 言説の秩序

言語表現は、(3)でみたように、人がコンテクストの中で自分の意図や態度を表出する社会的行為とみなされる。人はことばを介して一方で行為主体者として社会に働きかけ、社会を形成していくが、他方ではその主張や発想が言説の秩序として存在する社会固有のくびき(頸木)の影響をうける。

言語表現はコンテクストにより異なるが、言説の秩序は社会や時代によって異なる。言説の秩序に強い影響を与えるものとして宗教がある。宗教は、古来、人を統合する法の基礎をなしており、アジアに限っても仏教・儒教・道教・イスラム教・ヒンズー教・キリスト教などが入り乱れている。そのような制約をもつコンテクストの中で例えば論理 心情、明示性 あいまいさ、対立 和合、原理原則 現実適合、自律志向 他律志向、個人 集団などの2項対立でいずれを重視するか、ことばと真実、ウチとソトなどの関係や、敬意表現・ジェンダー・犯罪・狂気などをどのように考えるかは、文化により異なり、社会や時代が定める秩序によって変化していく。フォーコー Foucault (1970) が「言説の秩序」(L'ordre du discours) という題でコレージュ・ド・フランスの教授就任講演を行なった際、その冒頭で自分がどのように語ったにしても「言説によって運ばれるままに身を委ねるだけであり、言説のこの危なっかしい秩序に入りたいとは思わない」と、言説の秩序の支配から脱出し、講演をやめたい欲望にかられると述べているのも、このためである。言説の秩序は特定の価値観と無意識的に結合しており、社会の権力体制から押しつけられた規律であり、堅固な「壁」でもある。特定の社会や時代により構造化され、習慣化した思考法でもある(詳しくは児玉 2004:161 参照)。言語表現は本来このような制約をもつ。言説の秩序はいつの時代にもどこの社会にも存在する。問題はその「壁」が堅固であればあるほど、ことばは空洞化していく。その「壁」を破るためには、言説の秩序が特定の価値観と結合しているだけに、言説に埋め込まれている価値

観の再検討が常に迫られる。

異文化間で起こるコミュニケーション・ギャップの多くも言説の秩序を構成する価値観の違いに由来する。ヨーロッパ、カナダ、オーストラリアでは多文化主義のもとで異なる文化をもつコミュニティが平等の権利を保障されている。この状況は今後世界でさらに広がると予想される。今日多文化主義の多くの地域は平等の権利と相互不干渉を保障しているが、相互理解は必ずしも進んでいない。これは前節でみたところでもある。豊富な情報に加えて多様な価値観やサブカルチャーが共存しているが、相互にことばによる交流やぶつかり合いが存在しない状況に似ている。その点、言説の秩序による「壁」はますます厚くなっている。文化同化主義をとるか否かはともかく、多文化主義がより成熟した段階に達するには、異文化の共存とともに相互理解が不可欠であろう。

3. その結果

ことばがその裏づけや実体に欠け、空洞化することは思考そのものの弱体化を示唆している。ここではことばが力を失うことによりどのような言語状況が生まれるかについて主として日本に焦点をあてながら考えてみよう。

第1はことばのあいまいさである。ことばは有限の記号を用いて無限の概念を表現しようとするもので、本来、柔軟性をもちあいまいさを有しているが、日常的には特定のコンテキストで用いられることであいまいさは消え、送信者の意図や意味を伝えるうえでそれほどの不都合は生じない。ことばが空洞化するときのあいまいさは意識的につくられるものであり、その責任は主に発信者の側にある。

ことばのあいまいさは多様な要因による。言語の墮落とも呼べるあいまいさは、§ 2.1でもみたように、政治や戦争とかかわりをもつ。為政者は自分の主張や行動を正当化するために、実態を隠蔽したり糊塗するためにあいまいなことばを用いる。あるいは問題を矮小化したり単純化して善か悪か、敵か味方かに二分して、問題の本質をあいまいにする。

もちろん、このあいまいさは権力のことばに限らない。批判力や分析力を失ったマスメディアなどの諸組織だけでなく、個人の口実やごまかしなどにもみられる。あるいは情報の過剰化の波を受け、文章ことばから遠ざかるなかでことばによる思考そのものがうとまれている。判断資料が多い情報化社会の中であって、逆説的ながら、思考上の判断停止が進行している。そのことは自分の将来を予測してくれる占い師のご託宣がしばしば遊びでなく本気でうけとめられていることからもうかがえる。

言説の秩序としてあいまいさを特徴とすることもある。日本ではあいまいな表現は豊かな含意をもつとみなされ、必ずしも非難の対象にならない。その背景にはことばを介しての完全無欠な論理への不信があり、雄弁より寡黙、依言真如より離言真如が尊重されたりする。政治においても故意にあいまいな表現を用いた詭弁やはぐらかしが説明責任の放棄とみられることもなく、それほど厳しい批判を浴びないのもそのような土壌による（詳しくは児玉（準備中2）参照）。日本の言説の秩序といえるあいまいさはいっこうに衰えるきざしがみえない。その証拠に、1990年代より断定を避けるばかりの表現が若者の間に浸透している。

(8) a. お荷物のほう、お預かりします。

- b. 田中さんと話とかしていました。
- c. 私的には、そう思います。
- d. とても良かったかな、みたいな感じです。

ぼかし表現は一方で相手を傷つけないよう配慮しているが、他方では自分が傷つくことを恐れた自己防衛の精神から生まれている。相手との「距離」を保つことが互いを傷つけることのない「共生」「和」の道であるとすれば、このあいまいさは論理や自己主張などを中心とする文化の対極にあり、日本の文化とも深くかかわっている。

ことばの空洞化による第2の結果は価値観とかかわる。情報が過剰化する過程で多様な情報を鳥瞰することをあきらめ、相互に検証することもなく、互いに情報の価値を相殺している。その結果、かつての「指針」や「正統派」として仰ぐものも少なくなったが、言語表現で重要な柱である価値観の追究が企てられることもない。ある意味で旧来の価値観は喪失している。今日では「価値」を意識的に求めるわけではなく、社会的制約のしがらみから抜け出し、日常生活で自分の興味・関心を満たすことが一種の「価値」になっている。人の興味関心は多岐に分かれており、現象的には多様な価値観が存在するが、価値観相互の点検や批判が存在するわけではない。

20世紀末頃より「地球社会」の時代を迎えたといわれている。確かに地球は狭くなり、地球の反対側の情報もリアルタイムで入手でき、地球上の人間の活動が相互依存の関係で展開している。しかし活動の範囲や影響関係こそ広がったが、その諸活動は個人におけると同じく社会においても地球全体や長期の視点に立っているわけではない。経済市場ではグローバリゼーションが進行しているが、そこでは自己の企業や国家の目先の利益が基準になっている。地球温暖化や人口爆発の危機が時に論じられるが、その対策が地球規模で進んでいるわけではない。近視眼的に明日の市場には目を向けるが、10年または50年先の地球の姿に目は向いていない。

時代の転換期は常に価値観の変化をともなう。価値観の転換期はその間隙をぬって特定の価値観が現出する好機でもある。今日の世界の右傾化、政治や宗教での対立の先鋭化や原理主義の台頭もその例であろう。先鋭化した原理主義に対抗するために、同じ先鋭化した原理主義的な要素を取り入れても解決は困難であろう。価値観は本来そうした両極の要素よりはるかに複雑な階層からなるためである。§ 2.3の冒頭でことばと社会の関係に言及したことがそのままことばと価値観にもいえる。人は一方でことばを介してよりよい価値観を求めていくが、他方ではことばそのものが価値観の影響をうけていく。極端な価値観や信条が優先し、ことばや社会がそれに奉仕する場合、ことばや社会の空洞化はいっそう強くなる。

第3の結果はことばへの不信である。§ 2.1でオーウエル(1946)は言語の墮落を指摘した。その後スタイナーSteiner(1967)のいう言語の危機は「アウトシュビッツ以後」という時代の中で現代文明の、より強い告発でもあった。「夕べにゲーテやリルケを読み、バッハやシューベルトを演奏しながら、朝にはアウトシュビッツで一日の業務につくことができるものであることを、<あとに>きたわれわれは知ってしまった」という(由良訳『言語と沈黙』p528参照)。スタイナーによると、今日言語に活力と正確さを失わせた原因は政治の虚偽・戦争の蛮行・マスコミの氾濫などであり、これらはすべて現代文明の内部から発生したものである。言語こそ人間を規定する特徴であり、今日言語が墮落の時代相　ロゴスの沈黙の時代相　に移行しているということは人間の墮落をも意味しており、パプルの塔の再来であると警告した。その警告後約40年近く過ぎたが、スタイナーの嘆いた状況は今も変わらない。§ 2.1の末尾でみたように、イラク戦争や核不拡散条約

の失敗の背後には「力こそ正義なり」の主張がまかり通っている。「力」のない者はその声を封じられている。

ことばへの不信は§ 2で述べた状況もあり、ますます強まっている。言語は本来柔軟性をもっている。思考や創造的活動をうながすこともできるし、あいまいさを生みだし、人をだましたり事実を糊塗することもある。社会の平和や共生の価値観を生みだすこともできるし、特定集団や特定価値観のしもべになることもある。ことばはそれを用いる人間によってどのような世界をもつことができる。問題はことばの負の世界からいかに脱却するかである。スタイナーのいうロゴスの沈黙の時代相はことばが、さらには人間が本来の働きをなしていないことを示しているが、ことばそのものの放棄を意味するものではない。

ヨーロッパの言語観の源流は古代ギリシャ哲学にさかのぼる。ことばはロゴス(logos)であり、ロゴスはまた理性・論理(logic < logos)であった。ロゴスのあり方が真理のあり方であり、ロゴスは暗闇を照らす光であった。この言語観は「ヨハネ伝」冒頭の「はじめにことば(ロゴス)あり、ことばは神であり、光であった」のキリスト教に継承されていった。ことばへの不信はこうした素朴なロゴス観への不信でもある。旧来のロゴス観を批判したからといっても、ことばによる論理の追求や「真理」志向を否定するものではない。人間が社会において(3)の機能を十全にはたすためには、ことばを介する以外に方法がないためである。ロゴス観と日本の言語意識の基本的な違いは、前者が言語への不信から言語の再構築を探るのに対して、後者が言語への不信から言語を超えた世界に真実を求めるところにある。

日本ではことばを現実や人間の心と直結させたり、逆に言語表現に高い価値を認めず、言語を超越し沈黙へと高められる世界さえつくってきた。歴史的にはことばには霊力が宿るとしてことばを敬う言霊思想とことばは情報や知識を伝達する単なる道具であるとする言語道具主義の間を往復してきた(現在の日本の言語状況について詳しくは児玉(準備中1)参照)。言霊思想と言語道具主義は一見大きく隔たっているかにみえるが、いずれも論理への不信をもつ点では共通している。前者はことばには霊妙な働きがあり、その働きは呪文・呪歌などの呪術につながると考えており、後者は情報や知識の表面的な伝達機能のみに着目し、ことばを生み出している人の意図や思考、あるいはことばに埋め込まれている論理や背景などがまるでことばと無縁であるかのように考えている。仏教はともかく一般の言語意識では、ことばと心や真理の関係あるいはことばの社会的役割を直感的に問うことはあっても、心・真理・社会が本来どのようなものであり、ことばによってどのように記述され、ことばにどのような影響を与えているか、それぞれの全体と部分がどのような関係にあるかなどの道筋を追究してはいない。つまり、ことばと論理の関係を正面から見つめてきたわけではない。確かに完全無欠な論理は存在しない。ことばは一方では人間の生得的な能力に由来し、他方では人間社会からの影響をうけている。それだけにことばや論理には人間のもつ知力の限界や独善性の性向が埋め込まれている。しかし完全無欠な論理や絶対的な真理が存在しないからといって、ことばや論理を放棄して解決できるものではないし、すべてが相対化されコンテキストの中で決定されるものでもない。ことばや人間の限界や性向を見極めるには、ことばを介する以外に方法がない。

ことばのあいまいさがまかり通り、多様な価値観が相互不干渉の形で共存し、ことばの力そのものへの信頼が揺らいでいる。さらに日本の言説は児玉(準備中2)でみるように、自己主張や主体性の弱さをも特徴としている。こうした状況の中ではメッセージを伝える際ことばによる理路整然

としたロジックやレトリックがいやがられ、むしろ聞き手が安直に反応し理解できる感性・映像や軍事・経済などの「力」に訴えることが有効な手段となっている。多様な価値観や判断基準が存在し、一見自由にふるまっているかにみえるが、ことばへの信頼がなく論理や主体性が弱いため、人間全体がどこに向かって行くのか、その行方は不透明である。羅針盤のない航海のようなものである。しかし人は、生来、無秩序や無意味を嫌う。それだけに今後特定の目標に向けてもっともらしくみえる強力な「流れ」が出現したとき、現状は中身を不問に付したまま、一気にその「流れ」に群がる危険すら内包している。スタイナーが危惧したロゴスの沈黙の時代相は今日ますます深化しているのかもしれない。

4. おわりに

最近、国会周辺で「ことばの力」に関連して「言力」「言語力」という聞き慣れない用語が使われた。「言力」は小淵恵三元首相の私的諮問機関である「21世紀日本の構想」懇談会の報告書（河合2000参照）で用いられ、情報力・構想力・表現力・説明能力などをそなえたものと規定されている。その報告書は戦前の日本は軍事力を最終手段として行使することを辞さない権力政治（パワー・ポリティクス）志向の国であり、戦後は経済活動に全力をあげる金力政治（マニ・・ポリティクス）型に転換したが、今日国際関係において重要なものは言語を武器とする言力政治（ワード・ポリティクス）であるという。「言語力」という用語を盛り込んだ「文字・活字文化振興法」が超党派の国会議員の提案で2005年7月に成立した。「言語力」とは読み書きにとどまらず、調べる力や伝える力を含む幅広い能力を表すものと規定されている。この法律は読書週間初日の10月27日を「文字・活字の日」と定め、「言語力」を育てることをめざしている。子どもたちの学力低下が指摘されるなか、国語力の向上につなげようとするものである。

国会議員が最近ことばが力を失いつつあることに着目し、読書力や表現力を向上させようとする企ては評価する。「言力」や「言語力」だけをとってみると、それを強化すること自体には何の異論もない。しかし「言力」が盛り込まれている報告書や「言語力」を発題した国会議員の日頃の言語活動からみると、「言力」や「言語力」はいかにも付け焼き刃の対処療法とみえる。「言力」を説く報告書は日本が国際競争力をもつためには日本人全員が実用英語を使いこなせるように、英語を第2公用語にしようという提案をしている。報告書は1億2千万人を超える国民にとって使用言語の変更がいかに困難であるかがわかっていないし、「言力」政治への転換が日本の政治にとっていかに革命的であるかもわかっていない。国語力の低下を案じて「言語力」を唱える国会議員は自分たちが学校教育における国語教育の時間を戦前に比べて今日半減させてきたことをご存知なのであろうか。日本の国語は初等中等教育において例えば母語の英語を最重要科目と位置づけている英国と対照的である（詳しくは山本2003参照）。「言力」や「言語力」も大事であるが、国会内の議論で詭弁やはぐらかしがまかり通ったり不正献金を追及されて急に健忘症になるなど、社会におけることばの役割を十全にはたしていない実態を自ら改善することのほうが先決であろう。

言力や言語力は一朝にして身につくものではない。本来の言力や言語力とは話し相手に応じた上手な話し方とか上手な聞き方などに限らない。何を表現し、何を理解するかということこそ重要である。ここにはことばの役割が丸ごと関係している。ことばの力を回復するためには言語政策や言

語教育も大事である。しかしそれ以上に重要なことはことばの役割である(3)(4)との関連でことばが現実にもどのように使われているかを日常的に点検することである。あいまいさに寛容であることにより詭弁やはぐらかしまで大目に見てしまい、いつのまにか偽りの世界へ誘導されていく。こうした言語実態こそ問題である。言語が人間を規定する特徴であるとすれば、ことばの力は人間の力に平行している。現実にもことばが空洞化すれば、結果的にことばへの不信を招き、人間不信にもつながっていく。ことばへの不信はことばへの見方に影響を与え、ことばの役割そのものを変えていく。この悪循環に陥らないためには、社会におけることばの役割に常に立ち戻り、それが十全にはたされているか否かを絶えず確認する必要がある。

引用文献

- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
 ———. 1966. *Cartesian Linguistics*. New York: Harper & Row.
- Foucault, M. 1970. *L'ordre du discours*. Paris: Gallimard. (中村雄二郎(訳)『言語表現の秩序』1972, 東京: 河出書房)
- Graham, P., T. Keenan, and A-M. Dowd. 2004. 'A call to arms at the end of history: a discourse-historical analysis of George W. Bush's declaration of war on terror.' *Discourse & Society* 15 (2-3): 199-221.
- Halliday, M.A.K. 1961. 'Categories of the theory of grammar.' *Word* 17: 241-292.
- 橋口倫介. 1974. 『十字軍 その非神話化』東京: 岩波新書.
- Huntington, S.P. 1996. *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*. New York: Simon & Schuster. (鈴木主税(訳)『文明の衝突』1998, 東京: 集英社)
- 河合隼雄(監修). 2000. 『日本のフロンティアは日本の中にある: 自立と協治で築く新世紀』東京: 講談社.
- 児玉徳美. 2004. 『意味分析の新展開 ことばのひろがりに応える』東京: 開拓社.
 ———. 2005. 「価値観の重層性」『立命館法学』別冊(『ことばとそのひろがり(3): 山本岩夫教授退職記念論集』95-131).
 ———. (準備中1)「20世紀の言語学: 分析対象の縮小とその結果」.
 ———. (準備中2)「日本の言説の秩序: あいまいさがなぜ許されるのか」.
- Orwell, G. 1946. 'Politics and the English Language.' *Horizon* (April). Also in *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol 4 (1970). Hamondsworth: Penguin Books.
- Steiner, G. 1967. *Language and Silence*. Hamondsworth: Penguin Books. (由良君美ほか(訳)『言語と沈黙』2001, 東京: せりか書房)
- Woodward, B. 2002. *Bush at War*. New York: Simon & Schuster.
- 山本麻子. 2003. 『ことばを鍛えるイギリスの学校 国語教育で何ができるか』東京: 岩波書店.

(本学特任教授)